

学級集団における友人選択傾向と 性格特性に関する一考察

高 橋 宗

問 題

本研究の目的は、学級集団における被選択傾向について、児童の性格特性と関係づけて検討することである。学級集団を考える場合、児童間の関係は、ソシオメトリックテストの社会的地位で検討される場合が多い。その場合ソシオメトリックで示される地位は、学級集団内の友人選択によって決定されている。その選択基準となる「好き—嫌い」の判断の根拠が何にあるかを十分検討しておくことは、重要なことである。

この点について、児童の持つ性格および行動特性と学級集団におけるソシオメトリック地位との関係について、研究がいくつか報告されている

(Banney, 1943; Kuhlem & Lee, 1943; Young & Cooper, 1944)。

それらの報告によると、「統率性があり、熱心、活発で勉強家」といった積極的な行動特性と、「友情的で明朗で幸福そう」といった親しみのある感じよさを与える特性が社会的地位と関係していることが見い出されている。また松山(1963)は、17項目による性格行動特性の質問紙を作成し、評定させて検討した。その結果、社会的地位を決定する行動特性因子として、第1に「協調と責任感」を上げ、第2因子として「社交性と積極性」が考えられることを明らかにしている。これらの結果から、学級集団の仲間の選択に対する好き—嫌いの判断基準に、個人が持つ性格特性の要因が大きく関係していることが示唆された。

これに対して、長島・中野・田中・斉藤・中村(1955)は、社会的地位を決定できる要因として、役割行動が大きな影響を持っていることを明ら

(2)

かにしている。長島らの研究では、社会的地位の低い者に重要な役割を与え、指導することによって他の級友に受け入れられ、社会的地位が上昇することを確認した。また、それによって行動特性も変容することを明らかにした。このような考えは、たとえば学級委員のような役割を生徒の能力に応じて交代させ指導することによって、新しい人間関係を形成し、望ましい行動特性を獲得させることができることを意味しており、社会的地位と行動特性の相互形成仮説として示された。

この問題について蘭(1981)は、学級におけるソシオメトリック地位が中位および低位に位置する生徒に重要な役割を遂行させ、その役割行動がソシオメトリック選択行動および集団凝集性に及ぼす効果を検討している。それによると、役割行動に伴う地位と行動特性の相互形成性の仮説は、Loss群においては認められた。しかしM群では見い出されず、また行動特性の面においても有意性を認められなかったことを報告している。このことは、役割行動が社会的地位や行動特性を望ましい方向に変容させるのに、決定的な要因になっていないことを示している。これらの研究を通して考えられることは、社会的地位の変容に関しては、学級集団内の友だちから好まれる(選択される)性格・行動特性が重要な基準になっていると思われる。すなわち、各児童がもつなんらかの性格・行動特性が学級集団内での選択基準になっており、それが学級集団構造上の位置関係に影響を与えていると考えられる。したがって、地位の低い生徒に望ましい人間関係を求める意図から役割を担当させる場合でも、その生徒が持つ行動特性を十分に考慮する必要があるだろう。

そこで、本研究における分析の第一の観点は、ソシオメトリックにおける被選択及び社会的地位にどのような人格特性が関係しているのかまず検討してみる。

第二の観点は、被選択傾向の上位群と下位群との間に人格特性の関与の仕方に違いが見られるかを検討する。

第三の観点は、学級集団差の検討と集団凝集性についても吟味してみる。

方 法

被験者：大津市立の公立小学校4年生3学級の児童110名(男子、女子、それぞれ55名)を用いた。

手 続：まず各学級の児童に、ソシオメトリックテストを実施した。席がえをする時の友人選択という基準を用い5名制限法でおこなった。但し、該当者のない場合には無理に書く必要のないことを了解させた。友人選択に関しては、全員がほぼ記載していたが、排斥に関しては「いない」といった理由で書かれていない場合があり、各個人のデータにばらつきが見られた。次に、各学級の児童に集団面接方式でY・G性格検査を実施した。Y・G検査は小学2年～6年生用を用い、各学級の担任が1項目ごとに読み、それに従って児童が全項目について評定した。分析に対しては、Y・G検査によって得られる12特性の粗点を分析データとして用いた。

テストの結果に基づき被選択及び社会的地位と性格特性との相関分析を行なった。また友人から好まれる性格特性を検討するために、被選択数をもとに3分法で上位群(H)、中位群(M)、下位群(L)に分けた。そのうち、上位群と下位群についての比較検討を行なった。^{*}

調査は2学期末に実施され、学級編成後半年以上を経ている。

結果および考察

1. 選択・地位と性格特性

ソシオメトリックで得られた被選択数及び社会的地位指数が性格特性とどのような関係にあるかを見るために相関分析を行なった。表1は学年全体における分析結果である。被選択と性格特性の非協調性との間には -0.3070 の相関が認められた。同様の傾向が学級集団内の社会的地位から見た場合においても -0.2352 とやや低いが見られる。この性格特性は、不満感や対

^{*} 分析に用いられた3学級の上位群と下位群の人数は、上位群が6, 6, 9人、下位群が8, 8, 9人と一義的に決められた。

(4)

表1. 学年における選択・地位指数と行動特性との相関

特 性	指 数	C	I S S S
1 抑うつ性……………	D	-0.0400	-0.0722
2 回帰性傾向……………	C	-0.0727	-0.0797
3 劣等感……………	I	-0.0444	-0.0077
4 神経質……………	N	-0.0116	0.0188
5 主観性……………	O	-0.1617	-0.1381
6 非協調性……………	Co	-0.3070	-0.2352
7 攻撃的・無愛想 ……	Ag	-0.1206	-0.0031
8 一般的活動性 ……	G	-0.0780	-0.0650
9 のんきさ……………	R	0.0351	0.0565
10 思考的外向 ……	T	-0.1055	-0.1890
11 支配性……………	A	-0.0651	-0.0459
12 社会的外向 ……	S	0.0832	0.1372

人不信感の側面を見る尺度である。すなわち現在の自分に不満を持ち、他人を信用する気持ちになれないといった性格傾向を示すものであり、当然集団の成員から好まれる性格特性とはいえないだろう。したがって、学級集団内において他の児童から好意的に思われたり、社会的地位が上位になる要因としてこの性格特性が大きく関係している。この特性は、松山（1968）が行動特性として上げている第一因子と同様の傾向をもつものといえる。しかしその他の性格特性との間には、有意な相関を認めることができなかった。

そこで各学級ごとに子細に検討してみたのが表2である。その結果、A学級

表2. 学級別による選択・地位指数と行動特性因子の相関表

特 性	学 級	A 学 級		B 学 級		C 学 級	
		C	I S S S	C	I S S S	C	I S S S
1 抑うつ性……………	D	0.0655	0.0338	-0.2869	-0.1105	0.0809	-0.0717
2 回帰性傾向……………	C	0.0037	-0.0565	-0.1501	-0.1278	-0.0629	-0.0055
3 劣等感……………	I	0.1353	0.1241	-0.2702	-0.1671	0.1421	-0.0511
4 神経質……………	N	0.0640	0.0024	-0.1627	-0.0237	0.2247	0.0174
5 主観性……………	O	0.0175	-0.0111	-0.3654	-0.3176	-0.0219	-0.0808
6 非協調性……………	Co	-0.3655	-0.4207	-0.2924	-0.1895	-0.0278	-0.3802
7 攻撃的・無愛想 Ag	Ag	-0.2363	-0.2692	-0.0232	-0.0809	0.2625	0.0044
8 一般的活動性… R	R	-0.4290	-0.2341	-0.1474	-0.1946	0.3467	0.1251
9 のんきさ……………	G	-0.1605	-0.2070	0.0977	0.0576	0.1849	0.2664
10 思考的外向……………	T	-0.2267	-0.3187	-0.3912	-0.1998	0.1109	0.2041
11 支配性……………	A	-0.4025	-0.3151	-0.0562	-0.1528	0.2827	0.2301
12 社会的外向……………	S	-0.1685	-0.0249	0.1750	0.0755	0.4994	0.3829

では被選択傾向と相関がみられる性格特性は、非協調性、活動性、支配性の3因子である。これらの特性の非協調性については、学年全体に見られる傾向と同じものでもある。それに加えてこの学級集団では、「身体を動かすことが好きで活発な性格」を示す一般活動性との間に -0.4290 。「リーダーシップがあり、社会的指導性の特性」を持つ支配性と -0.4025 の相関が見られた。これを、社会的地位指数との関係でみると、「非協調性と支配性」に相関がみられ、それ以外の特性では、「物事をクヨクヨ考えない呑気な性質」を意味する思考的外向との間に -0.3187 の相関がみられた。それに対して、B学級では被選択傾向と主観性（空想的、些細なことが気になり冷静に物事が判断できない）といった性格特性との間に -0.3654 。思考的外向とでは、 -0.3912 の関係が見い出された。しかし社会的地位指数でみた場合には、主観性との特性において -0.3176 の相関がみられただけで、他の特性との間には関係が見い出せなかった。C学級では、被選択傾向と社会的外向では 0.4994 。一般的活動性との間では、 0.3467 といずれも正の相関が見い出された。また社会的地位指数でみると、社会的外向との間で 0.3829 。非協調性では -0.3802 の相関が得られた。

これらの結果から、被選択傾向及び社会的地位指数と性格特性の間には相関関係がみられ、友人選択行動や学級集団の構造化に関係があることがみいだされた。ただ学級別での比較では、性格特性の項目や相関に違いが見い出され、学級集団によって性格特性の関与の仕方が異なることが判った。

2. 被選択上位群と下位群の性格特性

ソシオメトリックテストを実施すると、多くの人から選択される人とそうでない人が存在する。その被選択数の違いによって性格特性がどのように異なるかを検討してみたのが表3である。学年での結果によると、上位(H)群と下位(L)群の間では非協調性、一般活動性、思考的外向の各特性において差が認められ、検定の結果5%水準において有意な差が見い出された。この結果をY・G検査の因子特性と合わせて考えてみると、次のことが言える。すなわち、上位群において友人から選択される傾向の高い児童の性格特

(6)

表3. 学年における被選択上位群と下位群の行動特性得点

特性	グループ	上位群		下位群		t
		Mean	SD	Mean	SD	
1 抑うつ性.....	D	1.76	1.66	2.33	1.53	-1.0235
2 回帰性傾向.....	C	2.76	1.63	3.50	1.98	-1.1618
3 劣等感.....	I	2.41	1.78	2.83	1.89	-0.6575
4 神経質.....	N	2.71	1.84	2.72	1.88	-0.0252
5 主観性.....	O	2.24	1.48	2.72	1.24	-1.0285
6 非協調性.....	Co	1.59	1.65	2.89	1.70	-2.2329 ※
7 攻撃的・無愛想.....	Ag	4.65	1.68	5.11	1.82	-0.7597
8 一般的活動性.....	G	4.71	1.36	5.83	1.61	-2.1680 ※
9 のんきさ.....	R	4.06	2.07	3.67	2.08	0.5422
10 思考的外向.....	T	1.94	1.51	3.50	2.14	-2.4027 ※
11 支配性.....	A	4.24	1.99	5.11	1.24	-1.5276
12 社会的外向.....	S	5.35	2.37	5.00	1.97	0.4655

※ P<0.05

性としては、現在の自分には不満もなく満ちたりており他人に対しても善意的で協調的に接することができる。物事に対する考え方は、慎重で熟慮するタイプが多いという特徴を持っている。それに対し、下位群で友人から選択されることが少ない児童は、対人に対し不信感を持ちやすく、物事を余り深く考えずにすぐ調子にのりやすく、又呑気な性格といった逆の特質を持っている。

このような上位群と下位群で示される性格特性の違いが各学級集団において

表4. クラス別、被選択上位群と下位群の行動特性得点

特性	学級	A学級				t	B学級				t	C学級				t
		上位群		下位群			上位群		下位群			上位群		下位群		
		Mean	SD	Mean	SD		Mean	SD	Mean	SD		Mean	SD	Mean	SD	
1 抑うつ性.....	D	3.17	1.86	2.25	1.71	0.8831	1.00	0.94	1.75	1.39	-1.2332	2.89	1.52	3.11	1.52	-0.2917
2 回帰性傾向.....	C	3.17	1.21	2.88	1.83	0.3131	2.22	1.56	3.13	2.52	-0.8455	2.78	1.69	3.56	1.07	-1.1034
3 劣等感.....	I	3.67	1.89	2.50	1.80	1.0877	1.67	1.06	3.25	2.05	-1.9134	4.00	2.40	3.44	1.71	0.5330
4 神経質.....	N	3.83	1.95	2.88	1.69	0.9092	2.11	1.52	3.13	2.20	-1.0453	4.33	1.76	3.22	2.66	0.9853
5 主観性.....	O	2.83	1.07	2.50	0.71	0.6496	2.11	1.66	2.50	1.32	-0.4971	3.11	2.28	3.33	1.83	-0.2150
6 非協調性.....	Co	1.17	1.46	3.50	1.80	-2.4017※	1.78	1.62	3.38	1.87	-1.7752	2.33	1.56	2.56	1.77	-0.2661
7 攻撃的・無愛想.....	Ag	4.17	1.67	5.25	1.48	-1.1859	4.56	1.67	5.13	1.45	-0.7259	6.33	1.16	5.44	1.26	1.4729
8 一般的活動性.....	G	4.17	1.67	5.75	1.64	-1.6403	4.67	0.82	5.75	1.48	-1.7812	5.66	1.57	4.11	1.52	1.8667
9 のんきさ.....	R	2.67	1.37	3.13	1.90	-0.4636	4.78	2.16	3.88	2.32	0.7831	4.78	1.55	4.22	2.53	0.5300
10 思考的外向.....	T	1.67	0.75	2.75	2.59	-0.9217	2.33	1.83	3.00	1.80	-0.7101	3.67	1.56	3.89	1.66	-0.2754
11 支配性.....	A	3.00	1.91	5.13	1.17	-2.3772※	4.78	1.81	4.76	1.86	0.0293	5.33	1.56	4.00	1.89	1.5396
12 社会的外向.....	S	3.50	2.29	3.88	1.96	-0.3046	6.11	1.79	5.25	2.22	0.8300	7.00	0.67	4.67	1.49	4.0415※※

※ P<0.05 ※※ P<0.01

てどのように現られるかをみたのが表4である。それによると各学級集団によっても上位群と下位群において異なっていることが判る。まずA学級では選択上位群は下位群に比べて、協調性と支配性において5%水準で有意性が認められる。それに対しB学級においては、上位群と下位群の間に明確な差が認められなかった。ただ10%水準で協調性と活動性に差が認められた。C学級では、社会的外向の特性が1%水準で他の学級よりも明らかに有意な差が認められ、また10%水準ではあるが、活動性においても差が認められた。これらの結果から、各学級における選択傾向の高い性格特性について考えてみると、次のような事がいえる。A学級集団では、選択される傾向の高い人は低い人に比べ、まず第一に他人のことを考えるといった協調性が高いことである。第二の特性としては、指導者意識が強い人を好まない傾向を示している。すなわち指導者意識の強い人は、逆の意味では自己顕示欲の強いお山の大将的性格の人である。この学級集団では、そのような指導性よりもやや引込み思案的な消極的タイプを選択基準に求めている傾向が示された。これに対しC学級では、まず第一特性として社交的で誰とでも気軽に話のできる性格の持ち主が選択される基準の中心になっている。それはリーダーシップをとるといふよりは、学級集団において楽しくつき合える人間像が認められているといえる。しかしただのおしゃべりではなく、他人のことを考えて行動する時、自分に対する自信に支えられていることが必要といった活動性の面も必要な要因になっているといえる。AとCの学級に比べB学級では、上位群、下位群の性格特性に統計的に明白な差がなかった。ただ協調性や活動性が関与していることがうかがえた。しかし、活動性においては逆に上位群の方が低い傾向を示しており選択傾向と性格特性の間に関係をみい出すことができなかつたのが特徴である。

このような選択傾向と性格特性との関係が、学級集団の構造上どのように示されているかを検討したのが図1である。ここでは狩野(1979, 1985)が示しているソシオメトリック・コンデンスエイションに基づいて学級構造を図示してみた。それによるとAとC学級では学級集団がほぼ一つにまとま

(8)

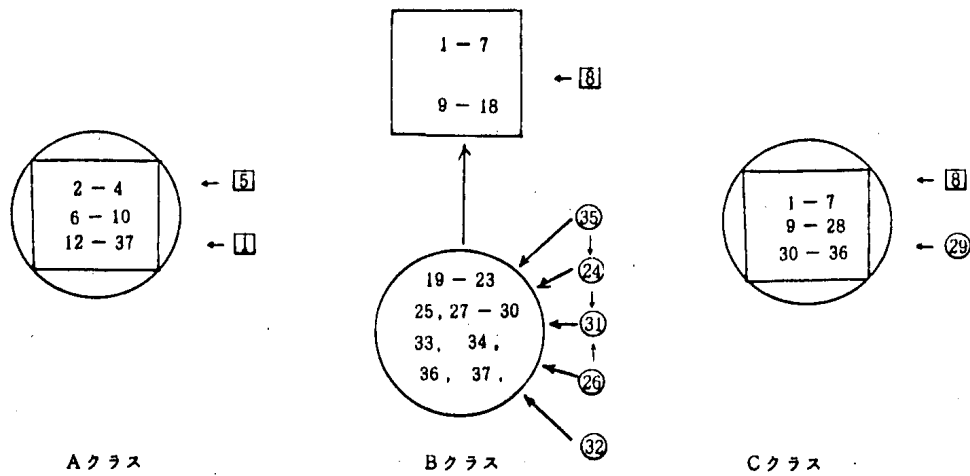


図1. 各クラスにおけるソシオメトリック・コンデンスエイション
(四角は男子、丸は女子)

った統合構造を示している。集団凝集性についてみるとA学級では $t_{ac} = 1.0872$ 、C学級では $t_{ac} = 0.8443$ であった。それに対してB学級は、男子と女子が大きく分極化しており、さらに女子内部でも分裂がみられるといった分団構造を示しており集団凝集性については、 $t_{ac} = 0.7825$ であった。すなわちB学級では、学級集団が一つの方向にまとまっていなかったことをあらわしている。この現象は、前述の友人選択に際し選択基準として特定の傾向が見られなかったことと一致しているように思われる。

このような結果から、学級集団内において選択基準としての明確な性格特性が示される場合、その学級構造は一つのまとまりのある統合構造として出現する傾向にあるといえる。それに対して、もし、選択基準としての性格特性に統一さを欠く場合には、分団構造のような状況が出現する条件になると考えることができる。いいかえるなら、学級集団で友人選択基準に一定の性格特性傾向が存在するか否かは学級集団構造上に大きな影響を与えていることを示唆している。ただその選択基準としての性格特性が、本来的に存在するものかあるいは学級集団編成後に形成されたものかは、今後の検討課題といえる。また、スター（人気者）や周辺児、孤立児の性格特性が選択基準となりうるのかも、今後検討してゆかなければならない。

要 約

本研究は、学級集団における被選択傾向及び社会的地位について、児童の性格特性と関係づけて検討することであった。被験者は、小学校4年生3学級110名である。ソシオメトリックテストとY・G性格検査が実施された。テストの結果に基づいて被選択数をもとに3分法で、上位群、中位群、下位群に分けて分析をおこなった。

主な結果は次の通りである。(1)被選択及び社会的地位と性格特性の非協調性との間に負の相関が見られた。(2)各学級別にみると、相関のみられる性格特性は、非協調性の他に活動性、支配性、主観性、思考的外向などが挙げられる。しかしそれは、各学級によって異なっており、学級差が認められた。(3)被選択上位群と下位群との間には、非協調性、一般活動性、思考的外向の各特性間において有意差がみられた。(4)上位群と下位群の違いは、各学級集団によっても明らかな違いが見られ、ソシオメトリック・コンデンスエーションの結果と一致することが示された。

これらの結果から、被選択傾向及び社会的地位と性格特性の間には相関関係があり、学級集団での友人選択行動が関係していることが認められた。また学級集団内の選択基準として明確な性格特性が存在するか否かが、学級集団構造に大きな影響を与えることが考察された。

今後の課題として、選択基準としての性格特性が本来的に存在するものなのか、学級編成後に形成されるものかどうかについて分析すべきであろう。

引 用 文 献

- Bonney, M・E. 1943 Personality traits of socially successful and unsuccessful children. *Journal of Educational Psychology*, 34, 449 - 472.
- 狩野素朗 1979 集団の大局的構造特性とソシオメトリック・コンデンスエーション 九州大学教育学部紀要, 24, 2, 13 - 23.
- 狩野素朗 1985 コンデンセーション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, 24, 2, 111 - 119.

(10)

Kuhlen, R.G. & B.J. Lee 1943 personalisti and socially accept ability in adolescence. *Journal of Educational Psychology*, 34, 321 - 340.

松山安雄 1963 学級における社会的地位と行動特性の研究 大阪学芸大紀要, 5, 12 - 24.

長島貞夫・中野佐三・田中熊次郎・斉藤定良・中村陽吉 1955 行動特性の変容条件としての社会的役割 日本心理学会第19回大会 発表論文集, 125.

田中熊次郎 1975 児童集団心理学 明治図書

田中熊次郎 1966 ソシオメトリーの理論と方法 明治図書

Young, L.L. & Cooper, D.H. 1944 Some factors associated with popularity, *Journal of Educational Psychology*, 35, 513 - 535.

蘭 千壽 1981 学級集団におけるソシオメトリック選択、行動特性、集団凝集性の変容に及ぼす役割行動の効果 教育心理学研究 29, 1, 51 - 55.